

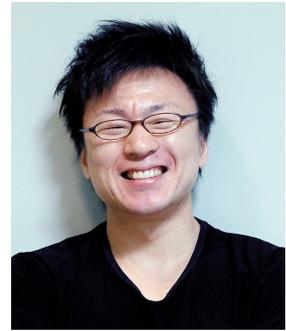
ソトよりウチをひいきする 心の仕組み

高知工科大学経済・マネジメント学群 講師

三船恒裕 (みふね のぶひろ)

Profile—三船恒裕

2011年、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員（PD）などを経て、2013年より現職。専門は社会心理学、進化心理学。



人々は様々な場面で他者を自分と同じ集団（「ウチ」）の人か、違う集団（「ソト」）の人かで区別する。単に「私たちは足が速いが、あの人たちは頭が良い」と区別するならよいが、「ウチの人には協力するが、ソトの人は知らん」というように、ウチをソトよりも優遇する傾向がある。これは内集団ひいきと呼ばれ、社会心理学において様々な研究がなされてきた。本稿では「ソト」よりも「ウチ」を優遇する現象に関して、新旧の知見を紹介したい。

人間はどのような場合にウチとソトとを区別し、ソトよりもウチを優遇するのだろうか。自然災害などで社会全体の資源が少なくなったときだろうか。それとも「我々に悪い人間はいないが、ソトの人間は信用ならない」というステレオタイプがあるときだろうか。タジフェルら (Tajfel et al., 1971) はこの疑問に対して「最小条件集団実験」という画期的な実験方法を考案し、答えを導き出した。彼らは複数の参加者を実験室に集め、クレーとカンディンスキーのどちらが描いた絵を好むかといった基準で二つの集団に参加者を分けた (図1)。つまり、彼らは「実験室の中でのみ存在」し、「取るに足りない理由で分類されただけ」という集団を作ったのである。ここには「クレー集団の人は優しい」というステレオタイプや、「カンディンスキー集団とクレー集団には長い争いの歴史がある」という集団間の利害対立 (やその歴史) など、おおよそウチとソトとを区別して扱う現実的・合理的な理由が存在しない。にもかかわらず、実験に参加した人々は自分とは違う集団の人よりも、自分と同じ集団の人に多くの報酬を分配す

るという、内集団ひいきを示した。最小条件集団においても内集団ひいきが生じるという実験結果は再現され、それにより社会心理学では「人間は内集団ひいきをしてしまう『バイアス』を持つ」という見方が一般的となっている。

では、なぜ人間はバイアスを示すのだろうか。社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) は所属集団への一体化と自尊心の働きで説明した。人間は「私は他の人よりも足が速いことが自慢だ」というように、個人間の比較によって自尊心を高めることがある。一方で「私が所属している〇〇大学は××大学よりも野球が強い」というように、自分の所属集団を他の集団と比較して自尊心を高めることもある。つまり、自分自身と自分が所属する集団を重ね合わせ、集団との一体感を感じる状況であれば、ウチへの良いことが自分にとっての良いことのように感じられ、自尊心が高まるのだ。これこそが、最小条件集団であっても人々が内集団ひいきを起こす理由だと社会的アイデンティティ理論は説明した。



図1 最小条件集団実験で用いられる画像の例

要するに、社会的アイデンティティ理論は「人々は自分の所属集団（ウチ）と自分自身が一体だと感じれば感じるほど、自分が所属しない集団（ソト）よりもウチをひいきする」と主張している。この主張を支持する知見は膨大にあるが、近年では他の理論も提唱されている。

バリエットら (Balliet et al., 2013) は特に「コスト（時間やお金など）を支払って他者の利益を増やす行動（協力行動）」に注目し、世界各国で行われた200を超える実験結果をメタ分析した。この分析によって様々なことが明らかになったが、特筆すべき点として「お互いに相手の所属集団を知っている時にしか内集団ひいきは生じない」という結果がある。これは例えばAさんとBさんが実験を行うとして、AさんはBさんが「ウチの人なのかソトの人」なのかを知っているが、BさんはAさんが「ウチの人なのかソトの人」なのか知らないという場合、Aさんは内集団ひいきしないということである。これは社会的アイデンティティ理論からは予測できない結果であり、閉ざされた一般互惠性理論によって説明可能な現象である。

閉ざされた一般互惠性理論では、人間は集団というものを「自分が他者に良いことをすると、その他者自身からではなく、第三者から良いことが返ってくるような関係が存在する場」と認識している、と主張している。諺で例えると「情けは人の為ならず、巡り巡って己が為」という関係性が存在するのが「集団」ということである。逆に言えば、そうした互惠性が働かないことが明確になれば人々はウチもソトも関係なく振る舞う。「相手は私のことを『同じウチの人だ』と認識していない状況」は互惠性が働かないことを示しているために内集団ひいきが生じないのである。

少し言い方を変えれば、閉ざされた一般互惠性理論は「人間は『あいつは嫌な人間だ』と思われぬように、集団内の他者には良い行いをする」という理論である。例えば、パソコンのデスクトップ画面に抽象的な目の絵が表示されているだけで所属集団への協力性が高まるという研究もある (Mifune et al., 2010)。人間はウ

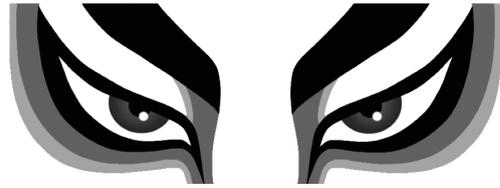


図2 Mifune et al. (2010) で使用された「動く防犯の眼」(東京都)

チの中で助け合うのが当たり前で、助け合わなければ痛い目を見るということを直感的に理解しているために、監視されているような目の絵だけでウチには協力するのである (図2)。

もうひとつ、多くの研究から見えてきたことがある。それは「人間はソトの集団に対して攻撃的になる」という現象がほとんど観測されないという事実である (Yamagishi & Mifune, 2016)。戦争や差別という例を思い浮かべると、人間はソトの集団の人に対して何の理由もなく攻撃的になると思いがちだが、実験研究の結果はそうした見方を支持していない。

人間は進化の歴史において集団生活に適応的な心の仕組みを身につけてきた。それは「情けは人の為ならず」の原理による集団内協力をもたらす心理であり、決してソトの人々を攻撃するような心理ではないのである。

文 献

- Balliet, D., Wu, J. & De Dreu, C. K. W. (2014) Ingroup favoritism in cooperation: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 140, 1556-1581.
- Mifune, N., Hashimoto, H. & Yamagishi, T. (2010) Altruism toward in-group members as a reputation mechanism. *Evolution and Human Behavior*, 31, 109-117.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P. & Flament, C. (1971) Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979) An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.) *The Social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks Cole. pp.33-47.
- Yamagishi, T. & Mifune, N. (2016) Parochial altruism: Does it explain modern human group psychology? *Current Opinion in Psychology*, 7, 39-43.